



第23回研究奨励賞・第11回田中賞の選考委員会が平成22年1月25日19時から「あるめいだ」で開催された。本年度の選考委員は別掲されているように、学内から野田教授、磯部教授、学外から槍垣教授、狩野教授、同窓会から佐藤専務理事、江石学術担当理事が選任されている。予め各選考委員が1点から5点の5段階で採点、事務局で集計した得点の平均点を基にして、評点が高かった論文を中心に内容を吟味しながら選考を行った。当日は狩野委員と江石委員が欠席であり、それぞれから各論文に対する詳細な講評を載せて議論の参考とした。

単にインパクトファクターで選考すると、外科系の臨床論文などは選考されにくくなり、外国の一流研究室に留学をすれば受賞しやすいことになる。また、本人のオリジナリティーとプライオリティーがどの程度かということも判断することも必要であるし、一方で大学院生などの若手にオリジナリティーをどこまで求めるかということも難しい問題である。これらを総合した上で判断することになるので、選考委員会では白熱した議論が戦わされることになる。

本年度は研究奨励賞に14篇という多くの論文が寄せられ、優れた論文が多く見受けられた。平均点4以上の論文が2篇、3.5以上が3篇、3以上が5篇、その他が4篇であった。上記の様々な要因を加味した結果、本年度は以下の3篇が選考された。

船戸論文は留学先で行われた仕事ではあるが本人の寄与度が明示されており、インパクトのある臨床応用性の高い基礎研究ということで最高点を得て授賞となった。

新藤論文は国内で行われた研究である。やはり臨床応用性の高い基礎研究であることが評価された。現在は臨床に従事しているということであり、今後の研究活動を支援する本賞の主旨に合うかということも議論となったが、この授賞を機に更に研究へのモチベーションを持って貰うことも必要であるということ授賞対象となった。

堀江論文も国内で行われた研究である。最近の流行である幹細胞を用いた研究であり、動物実験ではあるが臨床応用の可能性が高く、整形外科から報告された整形外科的な論文であるとのことで高い評価が得られた。

その他の論文もレベルは高く、特に川内潤也(医43)論文、西田陽一郎(医46)論文、望月智之(医44)論文は比較的高得点を得て、良い論文であると押す委員もいたが、上記3論文を逆転するほどの根拠はないとの結論となった。残念ではあるが今後に期待したい。

選考委員会の結果は理事会に報告され、研究奨励賞3篇、田中賞1篇を受授対象とすることが異論なく承認された。授与式は3月30日にガーデンパレスで開催される同窓会主催の新入研修医・研修終了者歓迎会の冒頭に行うことになっている。

第23回研究奨励賞受賞者

(五十音順)



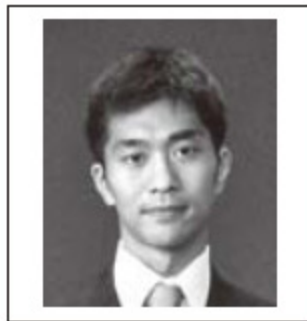
しんどう ゆかり
新藤 優佳 (医43・平7卒)
たけな眼科勤務医・
信州大学臓器発生制御医学講座 研究員

多彩な生理活性を有するアドレノメデュリンの受容体に注目し、補助タンパクであるRAMP2のノックアウトマウスを作成した。RAMP2過剰発現細胞も使い、RAMP2が血管新生を促進すること、血管構造の形成・維持に必須であることを示した。RAMP2を標的として構造的・機能的に安定した血管が作成され、血管再生療法に繋がるとした。



ふなと ひろふみ
船戸 弘正 (医42・平6卒)
東邦大学医学部
解剖学講座微細形態学分野 講師

摂食行動を促進する神経ペプチドとして同定されたオレキシンはエネルギー出納を負に調節するとされている。その機序を調べたところ、2型受容体を介してレプチンの作用を増強することによってその効果を発現すること、2型受容体が抗肥満薬のターゲットとして重要であることを示唆した。



ほりえ まさふみ
堀江 雅史 (医49・平13卒)
米国テキサスA&M大学
ポストドクトラルフェロー

ラット広範囲半月板切除モデルを用いて膝関節内に滑液幹細胞を投与し、その影響を検討した。その結果、滑液幹細胞は他臓器へ移行することなく半月板欠損部に生着し、半月板様細胞に分化することを明らかにした。半月板再生治療に繋がる成果である。